

「愛」の一文字から思うこと

中 澤 清

今NHKで時代大河ドラマ「天地人」が放送されています。その主人公直江兼続は兜の前立に「愛」の文字を掲げたことで知られています。そのことと関係があるのか直江兼続がタイトルバックに愛の旗を掲げて歩く場面があります。NHKのホームページには『「利」を求める戦国時代において、「愛」を信じた兼続の生き様』と愛を全面に押し出しています。

仏教では愛欲（欲望に執着すること）という言葉に代表されるように、愛は煩悩や貪欲を意味する言葉として用いられ、あまりいい意味を持った言葉ではありませんでした。もっとも「かなし」と読ませ、いとおしみ離れ難い気持ちを表現していたものではあったようです。いずれにしろ兼続の時代の愛は恋愛という意味もなく、親の子に対する愛や主君に対する忠誠を指した言葉でもありません。

兼続が愛という字を掲げて戦ったのは、軍神である愛染明王や愛宕権現に因んだともいわれています。いずれにせよ武士が愛を掲げれば、その愛の意味は無条件に領地を一所懸命に守るという意味と思って間違いありません。兼続が生きていた時代には崇高な意味での愛に相当する言葉としては、仏教では慈悲、儒教では仁という言葉しかなかったのです。

このように兼続が掲げた愛は、キリスト教が入ってくるまでは好ましい意味を持っていませんでした。キリスト教が入ってきた時にアガペの意味をなんと訳したらよいか、日本人が苦労したのはよく知られている話です。兜の前立の一文字から「愛」を重んじた武将という発想が生まれたのでしょうか、戦国時代を現代感覚でとらえたとんでもない勘違いです。とは言え、アガペという概念もギリシャ文化から借りたものであり、本当の意味を表現したものかどうか分かったものではありません。言えることは、人間が思いはかることのできるほど神様の愛はちっぽけなものではないということでしょうか。

（文学部教授）